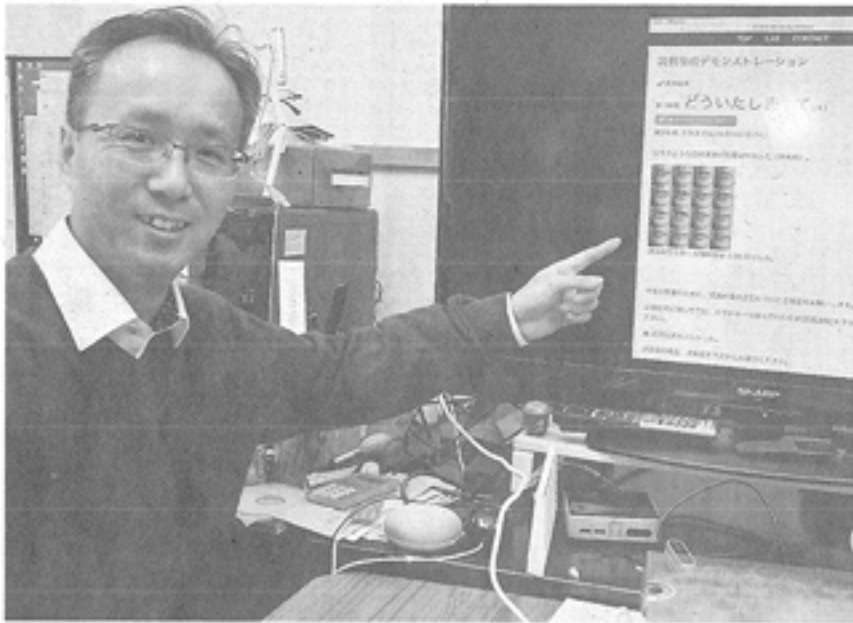


九州工業大情報工学研究院（飯塚市）の齊藤准教授が、唇の動きから言葉の内容を判別する「読唇技術」を紹介するアプリを開発した。利用者がスマートフォンやタブレットで発声時の様子を撮影すると、AI（人工知能）が分析して画面に文字で表示する。現在はいいさつなど25語しか対応できないが、日常会話を表示できるようにになれば、病気で声を失った人や聴覚障害者と健常者の意思疎通に有効という。

アプリは齊藤准教授や研究室の学生が、既存の映像認識技術や映像をAIが言語化する技術を組み合わせて作った。更に九工大生48人の協力を得て、0～9の数字と「こんにちは」「ありがとう」などあいさつ計25語の唇の動きを、撮影日時や場所を変えながら計30回動画で撮影してもらった。その後、それぞれの単語の唇の動きを動画を通じてAIに学習させた。アプリは齊藤准教授のサイトに名前や連絡先を登録すると使用でき、昨年末に公開したところ、障害児教育の関係者や発語ができなくなった人から「人前で会話が困難な子どもとの意思疎通に使えないか」と人のやり

「読唇技術」アプリを開発



タブレットと接続した画面に「どういたしまして」の文字が表示された。画面を指さすのが齊藤准教授

大学キラリ

学びシティー・北九州

取りに苦勞しており、関心がある」などの反応があったという。将来は唇の動きを工音すつ認識し、それをつなげて文章化して表示するアプリの開発が目標

で、工事現場など騒音が激しい場所での会話補助など幅広い用途が考えられるという。齊藤准教授は「アプリの能力を高めるにはAIに多くの人の唇の動きを学習させる必要がある。紹介アプリを通じて、協力者が増えれば」と話す。

【奥田伸二】